

# 「言葉政治」の時代がやって来た

## ——不利益分配ができるリーダーの条件——

「言葉政治」とは言葉を駆使した説得の政治のことである。国民の心をつかむ感動的なフレーズを連発する政治家でなければ政治リーダーは務まらない。こうした政治的資質に欠けたリーダーが続く日本の現状に、国民はため息をつくばかりだ。

高瀬 淳一

名古屋外国語大学・大学院教授

### 利益分配政治の終わり

奇妙な対照に思われるかもしれないが、私がかねてより「バラマキ政治」と比べるべき政治手法を「言葉政治」と呼んできた。

利益の政治的配分さえうまく差配できれば政治家として大成できた時代、重要なことは利害が対立しうる多くの関係者にながしかの満足を与える調整能力だった。当然、そこでの言葉遣いは、竹下登を典型とするような「言語明瞭・意味不明瞭」になる。当時は

それが関係者の反発を招かないために必要な政治的ワザだった。

しかし、財政再建が喫緊の課題となる時代を迎えて、最大の政治課題は「利益分配」から「不利益分配」に移行してきた。少子高齢化が進むなか、安易なバラマキ政治は財政破綻の危険を高める。これを打開するには、「不利益分配」といはいばらの道をあえて選ぶしかない。今はそういう時代なのだ。

ここで、私は「不利益分配」と

いう表現に二つの意味を持たせている。既得権益への利益分配を止めるという「不・利益分配」と、国民全体に新たな負担を強いる「不利益・分配」である。

どちらも、現実政治的には難題である。前者は支持母体からの反発を覚悟しなければならず、後者は国民全体からの批判を一身に浴びることにもなりかねない。

おそらく、自己の再選のみを考える保身的政治家には、こうした「不利益分配」の政治はできない。この種の「痛みが伴う改革」などというものは、「変人」だとかゆきされても自己の信念を通そうとする

タイプの政治家でないと、着手す  
らできないはずだ。

そもそも民主主義は、国民への利益給付を助長しやすく、負担増の実現をむずかしくする政治システムである。みんなが嫌がることを多数決で決めるのは、容易なことではないのだ。

ただし、よほどの説得上手が、国民の高い支持を背景に断固とした態度で押し進めれば、道が開けることがある。ゆえに、不利益分配の政治には、言葉を駆使した説得の政治、私の言う「言葉政治」が必要不可欠なワザとなる。もはや「意味不明瞭」ではいけない。

図1 「利益分配時代の政治」と「不利益分配時代の政治」

利益分配時代の政治＝バラマキ政治	不利益分配時代の政治＝言葉政治
公共事業の配分で業界団体や地方議員をまとめ、「カネとカズの力」で政治を動かす。	言葉の政治的利用によって国民の支持を獲得し、「世論の力」を背景に政治を動かす。
首相の座は政党や派閥の議員数で決定し、維持される。	首相の座は内閣支持率の高さ（と高さへの期待）によって決定し、維持される。
組織の力 > 党首の力	組織の力 < 党首の力

明瞭で、しかも国民の心をつかむ感動的なフレーズを連発する政治家でなければ、政治リーダーなど務まらない時代になってきているのだ。

私の理屈では、たとえバラマキをちらつかせても、言葉の力で支持動員ができない首相は、短命に終わる。反対に、ワンフレーズだろうがなんだろうが、国民の支持

### 党首には演劇的資質が必要

ちなみに、言葉政治の時代は、

政治リーダーと国民との直接的なつながりが必要不可欠な要素としている。政治リーダーを個人的に信頼できないのであれば、その人が訴える不利益分配など甘受できるわけではないからだ。

いわゆる党首力や党首イメージが重要となるのは、なにもマスメディアが人物に着目したゴシップ的報道を好むためばかりではない。今や党首は、国民を政治に結びつける結節点としての役割を果たしている。言い換えれば、そうした役割が果たせないようでは、いくら党内融和を実現できても、時代にふさわしいリーダーとは呼べない。しかも、政党政治の確立を願って導入された今の日本の選挙制度は、実際には「党首イメージ」の

を喚起できる首相は長期政権を担うことができ、困難な改革にも果敢に取り組めることだろう。要するに、今の首相には言葉の政治力が求められているのだ。

影響を受けやすい制度になっている。また、政治家たちが活発な議論を戦わせる場であるはずの国会でも、一番注目されるイベントは

### 中曽根・小泉には言葉政治力があつた

こうした私の見方からすれば、小泉純一郎元首相は政治がうまかった。バラマキ政治を否定し国民に「痛み」を求める以上、一方で国民の感情を鼓舞する政治的フレーズやパフォーマンスが必要となる

ことを、この政治家はおそらく直観的に理解していた。かれの「劇場政治」は多くの批判にさらされたが、政治における演劇的手法の重要性を理解していたからこそ、かれは内閣支持率の高さ（戦後最

「党首討論」だ。加えて、内政と外交のリンクが強まるなか「首脳外交」も頻繁に開かれており、ここでは国家を体現する政治リーダーたちがさまざまに自己と自国をアピールしている。

これらはいずれも、党首に演劇的資質の発揮を求めている。自らシナリオを描き、多少は派手なパフォーマンスをし、しばしば国民を感動させるセリフを吐く。こうした能力が現代の政治リーダーには必要とされている。

高)、選挙における与党の獲得議席の多さ（戦後最高）、政権の長さ（戦後第三位）において記録を残すことができたのだろう。

歴代政権において、小泉と同じ発想をした首相を他に求めるとすれば、「戦後政治の総決算」をスロガンに掲げ、あるいは「ロン・ヤス関係」という言葉をはやらせた中曽根康弘元首相だけだろう。かれもまた民営化改革を押し進めた政治家だった。

一方、田中角栄元首相は言葉の人ではなかった。聞き手を笑わせる話はずまかったが、政治はバラマキであると割り切っていたためか、かれの政治からは国民に向けてられた政治的メッセージは出てこない。

自身の「決断と実行」で、どんな要望でも「よっしゃ、よっしゃ」と受け入れ、カネの力で処理していく。そうした田中の金権的な政治手法だけが国民の印象に残っているのも、かれが言葉という政治的手段に頼らなかつたためだ。現実主義を標榜するバラマキ政治の元祖は、言葉へのこだわりなど、

## ひどくなった。ポスト小泉時代

さて、ポスト小泉時代の首相たちはどうだろうか。失礼ながら私には、いずれもが言葉政治の力量に欠け、しかも時を追ってひどくなっているようにしか感じられない。

小泉内閣を引き継いだ安倍晋三元首相は、それでも「美しい国」や「戦後レジームからの脱却」と

文学青年でない自分には不要な能力だと考えていたにちがいない。

ついでに言えば、ペンで記者を指名するなどの政治的パフォーマンスが話題となった細川護熙元首相もまた、言葉の人ではない。かれの内閣のスローガンは「質実内閣」であるが、格好のよさを追求する細川の印象にそぐわないこの言葉は、結局は人口に膾炙するものとはならなかつた。かれの内閣は短命に終わったが、その理由はこの内閣が多くくの政党の寄せ集めの上に成立したためばかりではないと私は思っている。

いったスローガンを広め、自分がやろうとした国造りの方向性を言葉で国民に知らしめようとした。また、小泉政権時代に「痛み」を感じた国民に対しては、「再チャレンジ」などの言葉を政治的に使って、なんとか激励しようとした。さらに安倍は、マスコミ受けの点では小泉に及ぶべくもないことを

見通したうえで、広報担当の補佐官を任命し、この弱点をカバーしようとした。おそらく安倍は「言葉政治」の重要性を認識していた。ただ、わかつていても、うまくはできなかった。

これに対し、福田康夫前首相や麻生太郎首相には、言葉によって国民の支持を喚起しようという姿勢が基本的に見られない。それどころか、両者とも、何をするつもりなのか、はっきりとした言葉で国民に伝えようとしていない。

事実、「ぶらさがり」などを見ていても、一人は皮肉っぽい口調でつまらなそうに語り、もう一人は投げやりな口調で偉そうに語る。そこでの言葉が国民にまで届くということが、ほとんど意識されていないのだ。

福田康夫前首相は、発足したばかりの自分の内閣を「背水の陣内閣」と呼ぶほど、評論家的な言葉遣いを好んだ。国会演説などでは「国民の視点」や「国民本位」といった言葉をよく使ったが、それはあくまでも自分が国民の意向を分析的に理解するという意味であって、国民の気持ちをかきたて、



### たかせ・じゅんいち

1958年東京都生まれ。名古屋外国語大学助教授などを経て現職。早稲田大学講師も兼任。専門は情報政治学、サミット研究。著書に「武器としての言葉政治」（講談社選書メチエ）、「情報政治学講義」（新評論）、「不利益分配社会」（ちくま新書）、「できる大人はこう考える」（ちくま新書）、「サミット」（芦書房）など。

共に政治を進めようという姿勢を示したものはなかつた。

かれは、首相を突然辞めた際、「私は自分自身を客観的に見ることができず、あなたと違ふんです」という名文句を残した。国民の気持ちを無視したまま、最後まで評論家的に自己を語り、そして眼前の記者を小馬鹿にしたこの発言は、福田の言葉政治力の低さをあらためて印象づける結果となった。

図2 失言の種類

## 1. 差別発言

直接的差別発言……特定の社会集団への偏見を表明  
 間接的差別発言……特定の社会集団への配慮の欠如

## 2. 不適切発言

政治的不適切発言……民主主義など国の基本原理に反する発言  
 政治的軽率発言……政治的配慮の不足によって失言とされる発言

## 言葉能力の低さが内閣「不支持率」を高める

余談ながら、私は政権のダメさ  
 を考えるとき、「支持率」の低さよ  
 りも、はつきりとした「NO」で  
 ある「不支持率」の高さのほうを  
 重視する。そして、新聞各紙の世  
 論調査で、内閣に対する不支持率  
 が六割を超えたとすれば、この内  
 閣は国民から見放されたと考え  
 ことにしている。この種の調査は  
 電話調査であることが多く、携帯  
 電話ばかりを利用する若年層を排  
 除しやすい。有権者全体をきちん

と調査したら、六割をはるかに超  
 える不支持率になるだろうと推測  
 できるからだ。

安倍内閣の不支持率が六割を超  
 えたのは、政権末期に当たる十一  
 カ月目のことである。福田内閣は  
 およそ半年で六割を超えた。そし  
 て、麻生内閣は早くも二カ月半ほ  
 どで、この域に達してしまった。  
 ちなみに、小泉内閣では皆無であ  
 る。

麻生内閣のふがいなさについて  
 は、政策の不備や遅れを理由にす  
 る人が多い。だが、私には、かれ  
 の言葉政治のセンスのなさが、こ  
 の内閣への不支持の高さに反映し  
 ているように思えてならない。

麻生首相は、自らの言葉で国民  
 を積極的に鼓舞できないだけでな  
 い。その発言は、しばしば政治リ  
 ーダーとしての資質の低さを印象  
 づけてしまう。漢字の読み間違い  
 をあざ笑おうというのではない。そ  
 れは知識や常識の問題であって、  
 政治手腕とは関係ない。私が気に

なっているのは、麻生首相の品位  
 のない発言や失言の多さである。

もちろん、失言にも「ひどさの  
 程度」がある。軽いほうから言え  
 ば、まずは政治的配慮に不足があ  
 った野党や国民から非難される

## 言葉政治のセンスに優れた米新大統領

次に、民主主義など国の基本原  
 理に反する政治的な「不適切発言」  
 がある。森喜郎元首相の「神の国  
 発言」などは、その典型といつて  
 よい。

そして、「差別発言」となる。こ  
 れには、麻生内閣の中山成彬元文  
 部科学相の「単一民族」発言のよ  
 うに、間接的に差別意識を表わし  
 てしまったものも含まれる。もち  
 ろん、特定の社会集団への偏見を  
 積極的に表明する差別発言のほう  
 が、程度においては悪質だ。

相手の社会階層がいかに高から  
 うと、医師という職業集団につい  
 て、「社会的常識が欠落した人が  
 多い」などと決めつけた麻生首相  
 の発言は、明らかに偏見や差別を  
 うながす最もタチの悪い部類の失

「軽率発言」がある。これは、言葉  
 の内容よりも、その言葉を発する  
 政治家の態度が国民や野党などか  
 ら問題とされるケースで、小泉元  
 首相の「人生いろいろ」などがこ  
 れにあたる。

言である。一国の首相が特定の職  
 業についての偏見を人前で語り、  
 しかもその職業集団は自分が党首  
 を務める政党の支持母体だったな  
 どという話は、笑うに笑えない話  
 である。国民は、政治的資質のな  
 い首相を持った情けなさに、ただ  
 ただため息をつくばかりだろう。

二〇〇九年一月、アメリカ合衆  
 国では、言葉政治のセンスに優れ  
 たバラク・オバマ氏が大統領に就  
 任した。

改革には言葉が要る。その資質  
 を持った政治リーダーをアメリカ  
 国民は見事に大統領に据えた。そ  
 れに比べてわが国は……である。  
 彼我の政治家の魅力の違いに嘆息  
 する日々は、いったいいつまで続  
 くのだろうか。